



TITLE:

京大広報 No. 511

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 511. 京大広報 1997, 511: 185-198

ISSUE DATE:

1997-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209246>

RIGHT:



# 京大広報

No. 511

1997. 3

## 目次

### 〈大学の動き〉

- 創立百周年記念行事について……………186
- 井村総長、アメリカ合衆国訪問……………187
- 部局長の交替等……………187
- 平成9年1月博士学位授与式……………187
- 平成9年度入学者選抜学力試験の  
第1段階選抜状況……………188
- 京都大学定時退庁の推進標語について……………189

### 〈部局の動き〉

- 第2回医学教育ワークショップ  
(KUROME-2) 開催……………189

### 〈栄誉〉

- 柏倉康夫教授(大学院文学研究科)が  
フランス政府の国家功労勲章を受章……………190

### 〈日誌〉

- ……………190

### 〈訃報〉

- ……………191

### 〈文化交流〉

- バンコクにて……………192

### 〈随想〉

- DNA 研究事始  
一つの国際賞についてのメモー  
名誉教授 石田 政弘……………194

### 〈洛書〉

- インターネットと大学改革に  
求められるもの……………195

### 〈資料〉

- 平成8年度教育実習実施状況……………196

### 〈公開講座〉

- 終了報告—  
大学院人間・環境学研究科公開講座  
「東アジアの文化と環境」……………198

### 〈話題〉

- 胸部疾患研究所附属病院  
入院案内ビデオの作成……………198
- 重油回収作業に参加……………198



平成9年度前期入学試験風景

## 大学の動き

### 創立百周年記念行事について

明治30（1897）年に創設された本学は、本年創立百年を迎える。

創立百周年記念式典・シンポジウム委員会では、創立百周年を記念して行う式典等の行事の企画・立案を行っている。

それぞれの記念行事については、実行委員会を設け、具体的な検討を行っているが、現在決まっている事項は以下のとおりである。

記 念 行 事	開 催 日 時 等
記 念 式 典	日 時 平成9年11月2日（日）10：30～ 会 場 京 都 会 館
記 念 祝 賀 会	日 時 平成9年11月2日（日）12：00～ 会 場 京都市勧業館
記念特別講演会	日 時 平成9年11月3日（月・文化の日）10：00～ 会 場 京都テルサホール テーマ 仮題「20世紀から新世紀へ」 講 師 ユルゲン・ハーバーマス（哲学者、社会学者、元マクス・プランク研究所長） シドニー プレンナー（分子生物学者、ケンブリッジ大学教授）
記念シンポジウム	日 時 平成9年11月3日（月・文化の日）13：00～ 会 場 京都テルサホール テーマ 仮題「20世紀から新世紀へ」—大学の可能性— パネリスト 利根川 進（マサチューセッツ工科大学教授、本学客員教授） 森嶋 通夫（ロンドン大学名誉教授） 廣中 平祐（本学名誉教授、山口大学長） 藤澤 令夫（本学名誉教授、京都国立博物館長）
記 念 音 楽 会	日 時 平成9年11月1日（土）18：00～ 会 場 京都コンサートホール 演 奏 京都市交響楽団 指 揮 井上 道義 フルート 佐々木 佐 パイプオルガン 高橋 聖子
記 念 公 開 講 座	日 時 平成9年10月18日（土）14：00～ 会 場 京都産業会館「シルクホール」 テーマ 「知の最前線はいま」

なお、上記の行事のほか、「京都大学展」、東京都、名古屋市、大阪市での「講演会」の開催、「記念映画」の制作等を企画している。

創立百周年記念式典・シンポジウム委員会委員長

菊 池 光 造

## 井村総長、アメリカ合衆国訪問

井村総長は、1月29日から2月2日までの間アメリカ合衆国（ハワイ州）に出張し、日米医学協力合同小委員会に出席するとともに高等教育・学術研究

機関関係者と医学教育・研究の現状等について、意見交換を行った。

## 部局長の交替等

### 遺伝子実験施設長

本席 佑遺伝子実験施設長（大学院医学研究科教授）の後任として、清水 章遺伝子実験施設教授（ヒト・ゲノム解析分野）が3月1日遺伝子実験施設長に任命された。



清水 章 教授

任期は平成11年2月28日までである。

## 平成9年1月博士学位授与式

1月23日（木）午前10時30分から、京大会館において、平成8年11月と平成9年1月を合わせた博士学位授与式が挙行された。

総長から各授与者に対し学位記が手渡された後、総長の式辞があり、午前11時45分終了した。

平成8年11月の学位授与数は、課程博士25名、論文博士44名の計69名、平成9年1月の学位授与数は、課程博士27名、論文博士82名の計109名であった。

各研究科別内訳は次のとおりである。

研 究 科	平成8年11月			平成9年1月		
	課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計
文 学 研 究 科	1名	4名	5名	—名	3名	3名
教 育 学 研 究 科	—	—	—	—	7	7
法 学 研 究 科	—	—	—	—	1	1
経 済 学 研 究 科	—	2	2	1	5	6
理 学 研 究 科	5	1	6	3	4	7
医 学 研 究 科	7	9	16	19	13	32
薬 学 研 究 科	1	4	5	—	5	5
工 学 研 究 科	6	12	18	2	24	26
農 学 研 究 科	5	12	17	2	20	22
人間・環境学研究科	—	—	—	—	—	—



## 平成9年度入学者選抜学力試験の第1段階選抜状況

平成9年度入学者選抜学力試験の第1段階選抜が行われ、2月12日（水）、志願者に通知された。学部別の合格者数は次表のとおりである。

学 部	募集人員	志願者数（倍率）	第 1 段 階 選 抜		本年度「募集要項」 の第1段階選抜合格 者の範囲	
			合格者数	倍 率		
総合人間学部	前 期	110	543（ 4.9）	530	4.8	
	文 系	55	274（ 5.0）	269	4.9	（注1）
	理 系	55	269（ 4.9）	261	4.7	（注1）
	後 期	20	420（21.0）	327	16.4	約12.0倍
文 学 部	前 期	190	651（ 3.4）	651	3.4	約 3.5倍
	後 期	30	467（15.6）	301	10.0	約 5.0倍
教 育 学 部	前 期	40	194（ 4.9）	192	4.8	約 3.5倍
	後 期	20	159（ 8.0）	159	8.0	約 5.0倍
法 学 部	前 期	340	982（ 2.9）	981	2.9	約 3.5倍
	後 期	60	684（11.4）	543	9.1	約 8.0倍
経 済 学 部	前 期	210	829（ 3.9）	768	3.7	
	一 般	160	518（ 3.2）	518	3.2	約 3.5倍
	論 文	50	311（ 6.2）	250	5.0	約 5.0倍
	後 期	30	491（16.4）	400	13.3	約 7.0倍
理 学 部	前 期	294	1,035（ 3.5）	1,013	3.4	（注1）
	後 期	32	1,153（36.0）	1,135	35.5	（注2）
医 学 部	前 期	90	459（ 5.1）	457	5.1	約 4.0倍
	後 期	10	308（30.8）	174	17.4	約10.0倍
薬 学 部	前 期	70	190（ 2.7）	190	2.7	約 3.5倍
	後 期	10	156（15.6）	154	15.4	約10.0倍
工 学 部	前 期	940	2,470（ 2.6）	2,462	2.6	約 3.0倍
	後 期	110	1,415（12.9）	1,409	12.8	約12.0倍
地 球 工 学 科	前 期	188	569（ 3.0）	566	3.0	
	後 期	22	342（15.5）	340	15.5	
建 築 学 科	前 期	85	193（ 2.3）	192	2.3	
	後 期	10	112（11.2）	112	11.2	
物 理 工 学 科	前 期	232	587（ 2.5）	586	2.5	
	後 期	28	370（13.2）	368	13.1	
電 気 電 子 工 学 科	前 期	126	332（ 2.6）	331	2.6	
	後 期	14	172（12.3）	172	12.3	
情 報 学 科	前 期	90	217（ 2.4）	216	2.4	
	後 期	11	136（12.4）	135	12.3	
工 業 化 学 科	前 期	219	572（ 2.6）	571	2.6	
	後 期	25	283（11.3）	282	11.3	
農 学 部	前 期	252	764（ 3.0）	762	3.0	約 3.5倍
	後 期	63	829（13.2）	828	13.1	約10.0倍
合 計		2,921	14,199（ 4.9）	13,436	4.6	
	前 期	2,536	8,117（ 3.2）	8,006	3.2	
	後 期	385	6,082（15.8）	5,430	14.1	

（注1） 総合人間学部前期及び理学部前期は、大学入試センター試験の5教科6科目の合計得点が800点満点中550点以上の者を第1段階選抜合格者とする。

（注2） 理学部後期は、大学入試センター試験の3教科3科目の合計得点が500点満点中300点以上の者を第1段階選抜合格者とする。

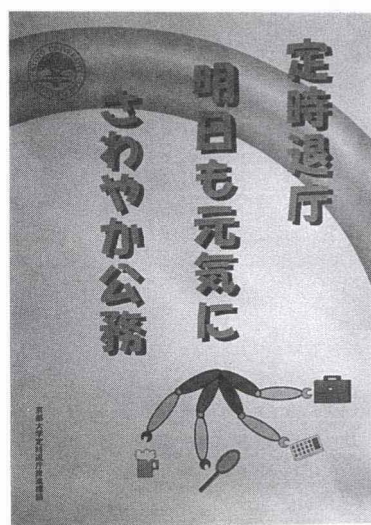
（備考） 法学部（後期）と経済学部（後期）には、外国学校出身者のための選考試験の募集人員20名以内と10名以内、志願者数60名と25名、第1段階選抜合格者数（第1次選考合格者数）43名と18名が含まれている。

## 京都大学定時退庁の推進標語について

本学では、職員の健康管理や余暇利用推進のため定時退庁推進標語を教職員に公募したところ、全学から25点の応募があった。

事務局長ほか6名の委員において審査の結果、数理解析研究所の応募した「定時退庁 明日も元気にさわやか公務」が優秀作に、総合人間学部の応募した「定時退庁、ゆとりの心、みんなの輪」が佳作に選ばれ、平成8年12月9日に事務局長より当該部局の事務長に表彰状が伝達された。

なお、優秀作はポスターとして全学に掲示し、定時退庁の推進に役立てることとした。



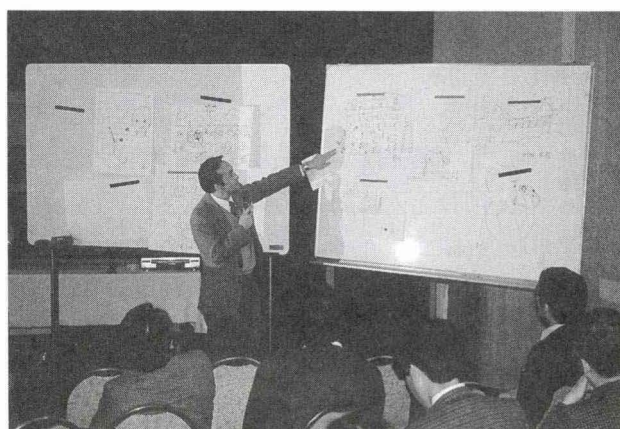
## 部局の動き

### 第2回医学教育ワークショップ (KUROME-2) 開催

平成8年12月27日(金)と28日(土)の2日間、都ホテルにおいて第2回京都大学医学教育ワークショップ (Kyoto University Retreat on Medical Education: KUROME-2) が開催された。教官が効果的な教授法を修得し、医学教育を改善するための討議を深める目的で、平成7年は医学部の全教授を対象に行われたが、今回は全助教授を対象に行われた。

タスクフォースには順天堂大学医学部尾島昭次客員教授、浜松医科大学植村研一教授、日本医科大学岩崎 榮教授、日本赤十字社武蔵野短期大学畑尾正彦教授、川崎医科大学総合臨床医学伴 信太郎助教授の5氏が迎えられた。

第1日目は、井村裕夫総長の挨拶と本庶 佑大学院医学研究科長・医学部長の開会の挨拶に続き、植村研一教授が「最近の医学教育の動向」について基調講演を行った。その後、よりよい教育法の原則と技法を習得し、直面する問題の解決法を身に付けるべく、学習目標や学習方略、教育評価法などの個別テーマについて全体会議と小グループ討論が繰り返された。また、第一日目の夕刻には、伴 信太郎助教授によって、標準模擬患者 (Standardized Patient:



SP) の実演、OSCE (Objective Structured Clinical Examination) の紹介も行われた。さらに、2日間にわたって、京大医学部における教育の問題点の列挙とそれらへの対応も、小グループおよび全体会議で討議された。

前年と同様、非常にタイトなスケジュールにもかかわらず、ほぼ全助教授が参加して和やかな雰囲気の中で熱心な討議が行われたことは、今後より良い医学教育を確立するための礎ができつつあることを確信させた。

(大学院医学研究科)



## 栄 誉

柏倉康夫教授(大学院文学研究科)が  
フランス政府の国家功労勲章を受章

このたび本学大学院文学研究科柏倉康夫教授に対して、フランス政府から国家功労勲章 (l'Ordre National du Mérite) シュヴァリエ章が授与され、その授与式が1月31日、フランス大使公邸で行われた。

柏倉康夫教授は、昭和38年東京大学文学部を卒

業、長年ジャーナリストとして活躍された後、平成8年に京都大学大学院文学研究科教授に就任され、現在に至っている。

同教授の今回の受章の対象となったのは、長年にわたりフランスの報道を通じて日仏両国の相互理解へ寄与貢献したこと、フランス文学者ステファヌ・マラルメについての研究及び多数の著書によるフランス文化の紹介が挙げられる。

(大学院文学研究科)

## 日誌

1997年1月1日～1月31日

- 1月6日 新年名刺交換会
- 18日 大学入試センター試験 (19日まで)
- 21日 附属図書館商議会
- 22日 国際交流委員会
- 〳 国際交流会館委員会
- 23日 学位授与式
- 24日 中華人民共和国 劉 智剛駐大阪総領事  
他1名来学、総長及び関係教官と懇談
- 〳 同和・人権問題委員会
- 28日 評議会
- 29日 総長、日米医学協力委員会出席のためア  
メリカ合衆国を訪問 (2月2日まで)



大学入試センター試験風景 (1月18—19日)

## 訃報

## 佐川弥之助 名誉教授



本学名誉教授 佐川弥之助先生は、1月14日逝去された。享年74。

先生は、昭和22年京都帝国大学医学部医学科を卒業、同大学助手、国立宇多野療養所医師、京都大学結核研究所助手、同講師、京都大学結核胸部疾患研究所助教授を経て昭和46年京都大学教授に就任、同61年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和53年10月から同57年6月まで結核胸部疾患研究所附属病院長、同年6月から同61年3月まで結核胸部疾患研究所長として大学の管理運営に貢献された。

本学退官後は、昭和61年4月から平成9年1月まで財団法人豊郷病院長（滋賀県）を務められた。

先生は、種々の新しい肺機能検査の方法を用いて

手術症例の術前術後の肺機能や手術合併症発生頻度の研究など、肺手術を中心とした術前検査としての肺機能検査の体系化を行った。また、四日市喘息について、肺機能による呼吸障害の定量的評価を行うなど、呼吸不全、肺水腫、睡眠時呼吸異常の研究を行い、これらの分野における先駆者としての役割を果たされた。

また、先生は、日本胸部疾患学会会長として同学会の運営に尽力されるとともに、日本胸部疾患学会、日本結核病学会の評議員・理事・名誉会員、日本胸部外科学会評議員・特別会員、日本呼吸管理学会等の特別会員を歴任され、永年にわたり日本の胸部疾患分野の学会で活躍し、多くの研究業績を残された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（胸部疾患研究所）

## 遠藤 吉郎 名誉教授



本学名誉教授 遠藤吉郎先生は、2月2日逝去された。享年78。

先生は、昭和16年京都帝国大学工学部機械工学科を卒業、三菱重工業株式会社に入社後、直ちに短期現役として大阪陸軍造兵廠に応召、昭和20年財団法人軸受研究所勤務を経て、同25年京都大学工学研究所助教授に就任。その後立命館大学理工学部教授、広島大学工学部教授を経て、昭和36年京都大学工学部教授に就任、機械材料学講座を担任された。昭和57年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、昭和57年4月から平成元年3月まで摂南大学工学部教授を務められた。

先生は機械材料の表面疲労と表面損傷、中でも磨耗と腐食疲労に関する研究において顕著な研究業績を残され、その発展に寄与されるとともに、表面工学の分野において多大の貢献をされた。主な著書に『表面工学』、『金属の腐食疲労と強度設計』等がある。

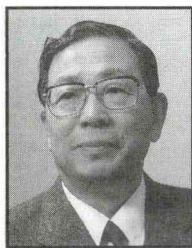
また、日本機械学会、精密工学会、日本材料学会、日本トライボロジー学会、腐食防食協会などにおいて、副会長、理事、関西支部長等の要職を歴任された。これら一連の研究教育活動、学会活動により、平成4年11月勲二等瑞宝章を受けられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（大学院工学研究科）



## 小川 和朗 名誉教授



本学名誉教授 小川和朗先生は、2月5日逝去された。享年68。

先生は、昭和29年京都大学医学部医学科を卒業後、神戸大学助手、京都大学助手、同大学助教授、関西医科大学教授を経て昭和51年京都大学教授に就任、平成4年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

先生は、組織化学、中でも電子顕微鏡レベルの酵素組織化学の分野の研究において数多くのすぐれた研究業績を残され、その発展に寄与され、特にライソゾームの研究においては多大の貢献をされた。主

な編・著書に『新酵素組織化学』『組織学』、『Electron Microscopic Cytochemistry and Immunocytochemistry in Biomedicine』等がある。

また、組織細胞化学会、電子顕微鏡学会、解剖学会などにおいて、理事、理事長、会長等の要職を歴任された。これら一連の研究教育活動、学会活動により、電子顕微鏡学会瀬藤賞、組織細胞化学会功労賞、ポーランドボズナニ医学アカデミーマルチンコウスキーメダル、国際組織細胞化学連合パイオニア賞を受けられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(大学院医学研究科)

## 中島 章夫 名誉教授



本学名誉教授 中島章夫先生は、2月12日逝去された。享年74。

先生は、昭和18年京都帝国大学工学部繊維化学科を卒業、同大学工学部助教授を経て昭和37年教授に就任、高分子分子論講座を担当された。昭和60年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和59年4月から同60年3月まで医用高分子研究センター長として、大学の管理運営に貢献された。

本学退官後は、昭和60年4月から平成4年3月まで大阪工業大学工学部教授を務められた。

先生は高分子化学、中でも高分子分子論に関する

研究において優れた研究業績を残され、その発展に寄与されるとともに、医用高分子の分野においても多大の貢献をされた。主な著書に『高分子の分子物性』『ハイテク高分子材料』等がある。

また、高分子学会、日本バイオマテリアル学会などにおいて、会長、理事、支部長などの要職を歴任された。さらに国際学会においても、IUPAC 高分子国際シンポジウムをはじめ多数の国際シンポジウムを主宰された。これら一連の研究教育活動、学界活動により日本化学会賞、米国バイオマテリアル学会 Clemson Award 等を受けられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(大学院工学研究科)

## 文化交流

## バンコクにて

縄 田 栄 治

1995年4月半ばから翌年1月半ばまでの約9ヶ月、文部省在外研究員としてタイの首都バンコクに滞在した。調査等のため、タイにはほぼ毎年来ており、長期滞在も今回で3度目になる。ただ、前2回がバンコクの西方約80kmに位置するカセサート大学

カムペンセンキャンパス内に滞在したのに対し、今回は子供の学校の都合でバンコクに住むことにした。外国人や富裕なタイ人の住む大きなマンションや邸宅とスラムが同居するスクムヴィット地区にアパートを借り、バンコク北方約100~120kmに位置す

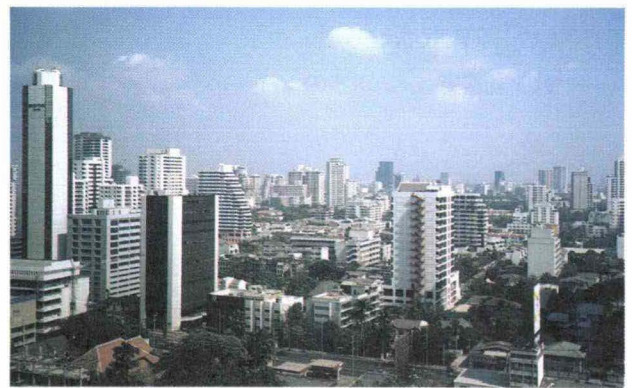
る調査地と、バンコク市内の北の方にあるカセサート大学に通った。

もうすっかり有名になったが、バンコクは慢性的交通渋滞にある。12年前初めてタイに滞在した時も、バンコクに来るたびに渋滞に辟易していたが、現在は当時の比ではない。子供の通っていた日本人学校は8時半始業であったが、非渋滞時には10分とかからない位置に住んでいるにもかかわらず、毎朝スクールバスが迎えに来る時間は7時10分である。この時間は遅い方で、子供の同級生の殆どは6時台に迎えが来る。有名私立学校に通うタイの子供たちには5時台に家を出るという例もめずらしくないから、日本人学校に通う子供たちが特別なわけではない。私自身も、調査地や大学から帰宅する際、まず考えるのは「今日は何時ぐらいに帰り着くかな」ということだった。

バンコクの交通渋滞は、タイ経済が誰も想像できなかった程のすさまじい勢いで発展した結果、これまたすさまじい勢いで増加した車にインフラ整備が追いつかなかった必然の結果であろう。しかし、夏期休暇や雨季休暇等の学休期間には目に見えて交通渋滞が緩和することから、特に有名公立・私立学校への子供の送り迎えが交通渋滞に拍車をかけているのは間違いない。にもかかわらず、こういった学校がスクールバスによる通学を打ち出すとまず親の賛同を得ることが容易でない。また、近隣の東南アジア諸国で実施されている、ラッシュ時には車に3人以上乗ることを義務づけるといった類の法律の制定もたびたび議論になるにもかかわらず実現しない。このあたり、タイの人、というよりバンコクの人の気質が表れているような気がする。

交通渋滞がひどく、またディーゼル車が多いため、当然ながら空気が悪い。渋滞を少しでも緩和すべく道路際に立つ交通警官の7割は肺に障害を持つという。長期間地方での調査を終えてバンコクに帰ってくると、今更のようにバンコクの空気の悪さに驚く。この町は、そぞろ歩きをして楽しい町ではない。

バンコクの生活環境は、交通渋滞・大気汚染に加え、雨季の終わりの洪水によりさらに悪化する。私はどういうわけか洪水と縁があり、最初に長期滞在した1983年も何十年ぶりかの大洪水の年だったし、今回も大洪水の年だった。1983年には、用事でバン



コク市内に出てくると立体交差の下の道路が川のようになっていて目を丸くした覚えがある。また、道路が封鎖されて市内に入れないこともあった。日本人学校を含めて殆どの学校が1〜2ヶ月の休校を余儀なくされた。新聞等の報道によると、今回はそれに匹敵、あるいはそれを凌駕する大洪水ということだった。しかし、この12年間に洪水からバンコク市内を守る技術は進んだようで、前回のようにスクムヴィット地区の道路が水につかるということはなく、日本人学校も休校になることはなかった。しかし、地区によっては水につかった所も多く、特にバンコク周辺部で中心部を守るために臨時に設けた防壁の外の居住者達は悲惨だったようである。

以上のように、バンコクの都市環境はとても優れたものとはいえない。にもかかわらず、この町には不思議な魅力があるようだ。今や海外旅行に行く人の必需品といってもいいぐらい有名になった「地球の歩き方」のタイ編には、「タイ国内をいろいろと見てまわろうと思っている人はバンコクに4日以上いてはいけない。この町の魔力にとらわれてしまっ出て行けなくなってしまう。」とある。私も同感である。事実、私の後輩でヨーロッパへ行く途中、トランジットでバンコクに降り立ち、そのままヨーロッパ行きをやめて1年滞在した者がいる。バンコクには、いわゆる言い難い大都会の魅惑が満ちているのはもちろん、古い時代から今に至るまで外界から入ってきたいろいろなものが、タイ的なものと融和してできた独特の雰囲気がある。光り輝く王宮、点在する古刹、種々の熱帯樹木・果樹、雑多な人で満ちた市場、世界に冠たるタイ料理、そして何よりも活気にあふれる人々、町並み。バンコクの魅惑は、少々の都市環境の悪化に負けていない。

(なわた えいじ 農学部助教授)



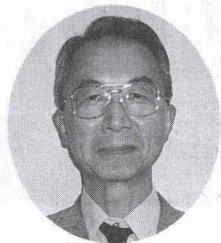
## 随 想

## DNA 研究事始

—一つの国際賞についてのメモ—

名誉教授 石 田 政 弘

私が理学部へ入学し、植物学を専攻したのは昭和23年、最近の新聞や出版界をにぎわしている「エコロジー」とか「共生」という言葉は、当時の世の中ではほとんど取り上げられることもない時代であった。DNA についても同じで、学会ですらまだ関心の低い時代であった。メンデル以来、その基礎が確立されてきた遺伝学は大きな発展をとげてきたが、その最も重要な根源であるべき遺伝子の本体は未だ不明確であるというような状態であった。分子生物学という学問分野もなかった。



卒業後大学院（旧制）に進学、「細胞は生命の最小単位である」という命題に心を引かれ、細胞学を専攻。そして細胞核中の DNA の機能をみきわめたいという「物の怪」に取りつかれ、それが私の運命を決めることになった。

当時 DNA 研究は「蘭学事始」と言うべき時代で、全学を通じて DNA を試験管で仕事をしている人は6、7人しかなかった。私は細胞核中の DNA の定量や生合成についての仕事から始めた。大学院1年目の成果を第17回日本植物学会（昭27，東京）で発表した。145講演中、DNA に関する発表は私らの講演のみという低調さであった。昭和28年、ワットソンらによる DNA の2重らせん分子構造が発表されるや、学会の様相は一変した。丁度放射性同位元素が米国より輸入されるようになり、早速使用、研究上強力な武器となった。

とにかく事始的、暗中模索で失敗をくりかえしながらの毎日であった。当時としては説明のつかないデータも度々出て苦慮した。例えば細胞核1個あたりの DNA 量が  $6 \times 10^{-12}$  g という値である。このような極微量の DNA（遺伝子の量）でヒト一個体の全形質がどのようにして決められるものなのか—という疑問である。また放射性標識チミジンが植物細胞の核以外に葉緑体にも大量に取り込まれる現象である。これは葉緑体にも DNA が存在する可能性を示すもので、従来の生物学、遺伝学の定説を大

きく変えることになり、事重大である。方法を変えて実験しても結果は同じであった。あまりにも常識外のことで、しばらくデータを伏せておくことにした。最終的にも方法論的にも残されたものは超遠心機による実験であった。しかしながら当時この新兵器は我が国には一台もなく、ニューヨークのコロンビア大学で研究する機会を得たのが幸であった。結論は同じ。葉緑体に DNA の存在を確認、1963年、論文として発表した。これによって半世紀来遺伝学上全く不可解な現象として取り扱われて来た非メンデル遺伝のメカニズムの解明に道を開くことになった。また植物細胞は光合成細菌と単細胞性動物細胞との“共生”によって進化的に成立して来たとする共生説に強力な支持を与えることにもなった。

さて細胞核 DNA（ヌクレイン）の発見はスイスの大生化学者 Miescher による（1869）。丁度発見100周年の時期になったのと、核外（葉緑体）DNA の発見を記念して、国際細胞共生学会（本部、ドイツ、Tübingen 大学）で「Miescher-Ishida Prize」授賞制度の創設の話が持ち上り、Miescher と並んで私の冠名の了解を求めて来た。私はあまりにも恐れ多い話であるので辞退したのであるが、Oxford 大学の Sir Dr. Smith の強い要請でこの栄誉を受けることにした。

毎年この分野で優秀な業績をあげた研究者に授賞、第一回授賞式はニューヨーク科学院後援で開催された本国際学会の席上、細胞進化学の権威、ボストン大学の Dr. Margulis が受賞した。

京都大学の一教授の冠名の国際授賞制度が制定されたことを、当時京都の一新聞社が聞きつけ、早速記事にしたいとの申し出があったが辞退した。私には冠名者に対する記念として、同じゴールドメダルが贈られてきた。ただ私はこのメダルは私すべきものではなく、11年間も大学院に在籍させてもらったお返しと思い、また京都大学の栄誉に帰すべきものと考えて大学（百年史編集史料室）へ寄贈しておいた。いま京都大学は創立100周年を迎えようとしている。これを一つの機会として、大学の栄光のためにも、あえてこのメモを寄せることにした。

（いしだ まさひろ、元原子炉実験所教授 平成2年退官 専門は細胞学、分子遺伝学）



## 洛 書

## インターネットと大学改革に求められるもの

佐々木 義 之

一昨年（1995年）の1月17日未明に淡路・阪神地域を襲った大地震は建物、道路、鉄道などに生々しい傷跡を残した。なかでも阪神高速道路が数百メートルにわたって横倒しになった姿はその地震の烈しさを物語っていた。同高速道路や私鉄、JRなどが寸断される中、国道2号線、42号線などの道路に、避難する車や人々、消火、救助などに向かう車、それらに加えて見舞い・救援に向かう人々が殺到し大混乱になった。この地域の幹線道路がいずれも平行に並び、これら幹線間を繋ぐ横糸が充分でなかったことが混乱にさらに拍車をかけたことは否めない。

この点に関して、先般テレビ番組を見ていて大変感心させられた。それは徳川時代における参勤交代の際、諸大名が封地と江戸を行き来する道筋が網目状に設定されていて、河川の水量、降雪、各宿場での大名の宿泊状況などを勘案しながら予定の日時に到着できるようルートが選択されていたというのである。少々飛躍のし過ぎの感なきにしもあらずであるが、テレビに映し出された網目状の街道図とインターネットの基本概念図とが二重写しになり、当時の為政者の卓見に感じ入った次第である。

さて、21世紀は従来とは全く違った新しい情報化社会になると予想されている。その情報革命の主役の一つになると考えられているのがインターネットである。インターネットとはそれぞれ独立したネットワークとネットワークが網目状に繋がったもので、ネットワークのネットワークともいわれる。そのネットワークは時々刻々成長しつづけ、全世界を覆うネットワークとなりつつある。インターネットでは、あるコンピュータのユーザー（発信者）から発せられた情報がネットワークを辿って伝えられる際に、一つのネットワークに何らかの障害が生じて交信が途絶えても、網目状に広がる別のルートを選んで受信者に届くシステムになっている。このようなフレキシビリティを可能にしているのはインターネットがそれぞれ独立した自律的なネットワークの集合体であるからである。

このインターネットの発想は21世紀が地方分権の時代であるという考え方とも軌を一にしている。ところが、阪神大震災の教訓を踏まえて、もう1本の幹線を用意する第二国土軸構想なるものが急浮上していることを耳にする。また、名神高速道路が飽和状態であるから第二名神を建設する計画が進んでいるらしい。道路計画には全くの門外漢であるが、インターエリア（地域間あるいは県間高速道路網）など21世紀を睨んだ思い切った発想の転換はないものだろうかと思う。翻って、大学に目を向けてみると、いま学部改組、教養部の廃止、大学院重点化などの改革が矢継ぎ早に進行している。これらの改革は戦後の学制改革にも匹敵する程の改革であるといわれる。とりわけ、日本の学制の中で最も遅れているといわれてきた大学院の充実を図ることが改革の柱の一つになっている。この改革を実りあるものとしていくためには、大学院のカリキュラム、学位授与の仕組み等について、教官一人一人の発想の転換が求められているような気がする昨今である。

（ささき よしゆき 農学部教授）

## 資 料

## 平成 8 年度教育実習実施状況

教育実習は教育職員免許状の取得を希望する者にとっては、教育職員免許法に基づき教育実習にかかわる事前及び事後指導の 1 単位を含め、3 単位必ず修得しなければならないものである。本学では、事前指導として、例年、5 月中旬にまず教育実習オリエンテーションを 2 日間実施し、教育実習一般、民族教育、障害者教育、同和教育について講義を行い、さらに各教科別に具体的な指導を行っている。附属学校を持たない本学としては、教育実習は原則として履修希望者の出身学校（高等学校、中学校のいずれでも可）の協力を得て、ただし、出身学校で承諾を得られない場合には京都市立学校の協力を得て実施している。実習期間は 5 月中旬から 11 月中旬までの間の 2 週間である。事後指導は、全体の教育実習が終了後、各教科別に行われる。

単位の認定については、教育実習校から報告される教育実習成績報告票及び実習生が提出する教育実習ノートと事前及び事後指導の評価を勘案して教育学部において行われる。

履修状況は、昭和 63 年 12 月の教育職員免許法の改正による必要修得単位の増加並びに新規教育職員の採用数減等の影響により昭和 50～60 年代に比して減少傾向にあったが、平成 6 年度から多少波があるものの増加傾向にある。参考までに、平成 3 年度から 7 年度までの実習終了者数と国公立学校に就職した人数を掲げておく。

なお、平成 8 年度の実習は、32 都道府県の各国公立高等学校 96 校、中学校 31 校、養護学校 3 校の協力を得て実施された。

## 1. 学部別の履修状況

区 分	学 部 ・ 研 究 科										計
	総合人間	文	教	法	経	理	薬	工	農	人間・環境	
参加申込者	18	(7) [1] 56	(1) 34	(3) 4	3	(6) [1] 43	5	(5) 26	(1) 19		(23) [2] 208
取り止めた者	6	9	1		2	1		3	3		25
実習終了者	12	(7) [1] 47	(1) 33	(3) 4	1	(6) [1] 42	5	(5) 23	(1) 16		(23) [2] 183

(注) 枠内の ( ) は大学院生数、[ ] は科目等履修生数でいずれも内数。

## 2. 実習を行った学校

区 分	学 部 ・ 研 究 科										計
	総合人間	文	教	法	経	理	薬	工	農	人間・環境	
京都市立中・高校			2			1			1		4
京都市立養護学校			3								3
取り止めた者											0
京都市立学校 実習終了者			5			1			1		7
出身中・高校等	18	56	29	4	3	42	5	26	18		201
取り止めた者	6	9	1		2	1		3	3		25
出身中・高校等 実習終了者	12	47	28	4	1	41	5	23	15		176

## 3. 教科別、校種別実施状況

区 分	学 部 ・ 研 究 科										計
	総合人間	文	教	法	経	理	薬	工	農	人間・環境	
国語	中 学 校		3	6							9
	高等学校		9	10							19
英語	中 学 校		3								3
	高等学校	2	12	3	1						18
社会	中 学 校		2	1							3
公民	高等学校	1	4	1	3	1					10
地歴	高等学校	2	13	6		1					22
理科	中 学 校	1				6	1	1	2		11
	高等学校	1		1		20	4	7	12		45
数学	中 学 校					1		4			5
	高等学校	5				14		11	2		32
保健 体育	中 学 校			1							1
	高等学校										
美術	高等学校		1								1
計	中 学 校	1	8	8		7	1	5	2		32
	高等学校	11	39	21	4	1	35	4	18	14	147
養 護 学 校				4							4
合 計		12	47	33	4	1	42	5	23	16	183

(参考) 平成3年度～平成7年度 教員として就職した者

平成8年6月6日現在

学部	年度	平成3年度	平成4年度	平成5年度	平成6年度	平成7年度	合 計	備 考
文 学 部	就職者	0	0	3	0	3	6	
	実習者	74	52	45	68	60	299	
教 育 学 部	就職者	5	1	8	4	6	24	
	実習者	21	31	19	26	34	131	
法 学 部	就職者	0	0	1	0	0	1	
	実習者	13	9	6	6	8	42	
経 済 学 部	就職者	2	0	1	1	0	4	
	実習者	11	6	11	5	6	39	
理 学 部	就職者	6	8	4	6	1	25	
	実習者	69	74	31	40	44	258	
薬 学 部	就職者	0	0	0	0	1	1	
	実習者	4	2	2	6	8	22	
工 学 部	就職者	1	0	0	1	2	4	
	実習者	29	36	17	17	16	115	
農 学 部	就職者	1	0	0	0	0	1	
	実習者	42	35	26	32	26	161	
合 計	就職者	15	9	17	12	13	66	
	実習者	263	245	157	200	202	1,067	

(教職教育委員会)



## 公開講座

## —終了報告—

○大学院人間・環境学研究科公開講座

「東アジアの文化と環境」

期 間

1月27日（月）・28日（火）

講習科目及び講師

「二十一世紀と漢字」

総合人間学部 助教授 阿辻哲次

「十八世紀日本絵画と中国思想」

京都国立博物館学芸課 美術室長

大学院人間・環境学研究科教授（併任）

狩野博幸

「年中祭祀と環境—古琉球の世界から」

大学院人間・環境学研究科助教授 伊従 勉

「二十一世紀の健康・長寿—日中食文化の貢献」

大学院人間・環境学研究科教授 家森幸男

受講者数 66名

## 話題

胸部疾患研究所附属病院  
入院ビデオの作成

胸部疾患研究所附属病院では、患者サービスの一環として、各一般病室にテレビを導入した。希望する患者さんは、専用のカードを買い求めることにより好みの番組を見ることができるようになった。また併せて、このテレビを利用して、当院において作成した『入院案内ビデオ』による入院案内の実施により、看護業務の省力化をも図ることになった。

『同ビデオ』の放映時間は15分程度ではあるが、シナリオは看護部が中心となって2ヶ月かけて作成したものであり、また、出演者については、全て本研究所の職員で行ったため、患者さんにとっては身近に顔見知りの人が出演しているので好評を博している。撮影は専門業者に依頼したが、ちょうどユリカモメが飛来する秋晴れのもと、鴨川の対岸から当病院の背景に大文字を望むプロローグ及びエピローグは、京都らしさを醸し出して患者さんに安らぎを与えていると好評を得ている。また、これまで新規患者の入院時に、看護婦が時間をかけて説明していたのが、まず入院時家族の人と一緒に『入院案内ビデオ』を見せた後、補足説明を加えるだけで足りるため看護業務の省力化も図られている。

（胸部疾患研究所）

## 重油回収作業に参加

本学職員19名は、1月31日（金）、2月1日（土）の両日ロシアのタンカー重油流出事故により重油が漂着した国立若狭湾少年自然の家周辺の海岸で、ボランティアとして重油回収作業に参加した。

